

自閉性症状の薬物治療を進めるための臨床研究の確立

国立精神・神経医療研究センター病院
小児神経科 中川栄二

【目的】小児の自閉性障害に付随する精神神経症状に対するわが国における薬物療法の実態調査、薬物療法の有効性や安全性に関する臨床調査、信頼できる薬物の臨床評価尺度の検証を第一の目標として研究を行う。小児の自閉性障害に付随する精神神経症状である不安、興奮、抑うつ症状ならびに睡眠障害の問題に対する抗精神病薬を主とする薬物治療をわが国で展開する臨床研究確立のための礎を作成することを本研究の最終目的とする。

【方法】

(1) 自閉性障害児の情緒・行動上の問題、不安、興奮、抑うつ症状ならびに睡眠障害の問題に対する薬物療法の実態調査：調査依頼は、発達障害を専門に診療している小児神経専門医や児童青年精神医学会認定医を対象に郵送あるいはメールによるアンケート調査を行う。調査項目：自閉性障害児に伴う情緒・行動上の問題、不安、興奮、抑うつ症状ならびに睡眠障害に対する薬物治療の実態調査。調査内容：年齢、性別、診断、診断評価方法、薬物療法の有無、薬物の種類（抗精神病薬、抗てんかん薬、抗うつ薬、抗不安薬、睡眠薬）投与量、投与方法、投与期間、有効性、安全性、副作用発現の有無など。

(2) 臨床評価尺度の検証：Aberrant Behavior Checklist(ABC)の日本語版である異常行動チェックリスト日本語版(ABC-J)による臨床評価と Child Behavior Checklist (CBCL) や Nisonger Child Behavior Rating

Form (NCBRF) などの評価尺度等を用いて、我が国における自閉性障害児に伴う情緒、行動上の問題に対する臨床評価尺度としての妥当性について検証を行う。

【結果】1153名(7名が宛名不明)のうち611名(53%)から回答を得た。薬物療法を行っている医師は448名(73%)であり、そのうち39%が就学前から、36%が小学校低学年から薬物療法を開始していた。薬物療法の対象となる症状は、興奮88%、睡眠障害78%、衝動性77%、多動73%、自傷他害67%であった。使用薬剤としてリスペリドン88%、メチルフェニデート67%、抗てんかん薬67%、睡眠薬59%、ピモジド20%であった。

【まとめ】

(1) 回答のあった75%の専門医が就学前から小学低学年までに自閉性症状に対して薬物療法を行っていた。二次アンケートに協力いただける289名の専門医に投与薬物の種類、投与量、投与方法、有効性、安全性等についてさらに調査を行い、安全で有効な小児の自閉性症状に対する適切な薬物治療の指針と治療ガイドラインの作成を目指したい。

(2) 臨床評価尺度の検証：ABC-J、NCB-RF、CBCLなどの評価尺度等を用いて、自閉性障害児に伴う情緒、行動上の問題に対する臨床評価尺度としての妥当性について検証中である。

これらの結果を踏まえて自閉性障害薬物治療研究会を立ち上げる予定である。

(精神・神経疾患研究開発費 課題 22-6 発達障害の神経科学的基盤の解明と治療法開発に関する研究 主任研究者：稲垣真澄)